

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1047 号	氏 名	阿 部 直 之
論文審査担当者	主 査 駒津 光久 副 査 山田 充彦 ・ 岡田 健次		
(論文審査の結果の要旨)			
<p>AMI に対して当院で PCI により再血行再建に成功した 69 例 (65±7 歳、男性 78.4%) を対象とした。PCI 直前、治療後 6 ヶ月、12 ヶ月、24 ヶ月と連続して d-ROM と BAP を測定し、心血管イベントとの関連について検討した。</p> <p>観察期間中のイベントは 26 例に観察された。イベント群と非イベント群の両群間の研究開始時点における患者背景に有意差はなかった。長期追跡における酸化ストレスの比較では、各測定時点における d-ROM 平均値に両群間で有意差はなかった。一方、BAP 平均値は、全観察期間を通じて各測定時の平均値が右肩上がりを示した非イベント群に対して、イベント群では治療後 6 ヶ月時に一過性に低下し、さらに同時点での平均値は非イベント群と比較し有意に低値となった (2456μmol/L vs. 2849.1μmol/L、$p<0.001$)。イベントの大半は治療後 6 ヶ月から 12 ヶ月の間で観察された。ROC 曲線を用いた心血管イベントを予測し得る治療後 6 ヶ月時の BAP 平均値のカットオフ値は 2718μmol/L となり、それ以下の患者群はそれを超える患者群と比較して有意に予後不良であった。年齢、腎機能で調整した多変量解析において、治療 6 ヶ月時の BAP 平均値 2718μmol/L 以下は心血管イベントの独立した予後予測因子であった。</p> <p>その結果阿部直之は次の結論を得た。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 本研究は長期間にわたり酸化ストレスを測定し、心血管イベントとの関連を検討した最初の報告である。2. 酸化ストレスは複数の要因によって修飾を受けるとされるが、全観察期間を通じてイベント群と非イベント群の患者背景には両群間で差を認めなかった。6 ヶ月時の一過性の BAP 低下はイベント好発時期と一致していることから、6 ヶ月時の BAP の有意差はイベントを反映した結果と推察された。3. イベントの大半は再狭窄に対する再血行再建治療であった。今回の事象が酸化ストレス増加に関連した新生内膜増殖の結果であるのか原因であるのかについては不明である。 <p>以上の結果より、心血管イベント、特に再血行再建治療は抗酸化ストレスの指標である BAP の低下と関連していることが示唆された。</p> <p>今後 AMI 後の心血管イベント、特に再狭窄の予測において BAP の長期追跡が有用であると考えられる。</p> <p>本論文は AMI 患者の心血管イベント予測における BAP 低下の有用性について検証した臨床的に有意義な研究であり、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			